

状況・論理・価値

— 上代の「べし」と非現実事態 —

仁 科 明

0. はじめに

万葉集を主対象とし、上代の「べし」をあつかう。「べし」に関する議論は、かつて盛んだったというだけでなく、近年も議論が多い。このように継続的な関心が寄せられてきたのには、その意味・用法が多様であることや、共通語の「べきだ」、方言語形「べー」のように用法と形態を変化させつつも現代語（諸方言）にまで生き残っていることが大きい。用法の広がりや共時的な根拠づけからも、通時的な用法変化の過程の理解からも、興味深い対象であり、どちらの問題についても、完全には解決されていないようなのである。上代語をあつかう本稿の主関心は、前者の問題に向いている。

しかし、「べし」の用法は多岐にわたり、細かく見はじめると際限がない。手掛かりなしに臨むならば用法の整理も困難である。「らむ」を論じた前稿（仁科二〇一六）で、上代語の述語形式の体系に関するおおまかな見通しを示したが、そこでは「べし」

について「非現実事態＝確言」形式との位置づけをおこなった。以下では、まず、この規定について簡単に説明し（第1節）、それを手掛かりに、非現実事態を表現するための支えのあり方によって上代の「べし」の用法を整理し、一方で、「べし」の用法がその規定の中におさまるかどうかを確認していく（第2節、第3節）。「べし」理解に関する見通しを得ると同時に、蓄積されてきた先行研究の意義について見つめなおすことができれば、と考える。

1. 「べし」の性格に対する理解

文であらわされる事態は、話手（の現在）を基準に位置づけられていると考える。そうした立場から事態は、現実領域（過去および現在領域）に属するか非現実領域（未来および可能性領域）に属するかによって二分されることになる。このうち、前者＝現実事態で、とくに話手が知覚・経験した内容は話手が積極的に保証を与えることができるのに対して、後者＝非現実事態は、定義的に確認が不可能なものであり、通常は話手の想像として述べる

ほかない。仁科(二〇一六)では、話手が積極的な保証を与えつつ述べることを「確言」、(保証を与えることができず)あくまで話手一個の想像として述べることを「臆言」と呼んでおいた。一方、通常は想像してみる(臆言的に語る)ほかない非現実の事態に対し、積極的な主張(確言)が可能になる場合も考えられる。「べし」はそのような表現——非現実事態の確言——を行うための述語形式であると考える。

すぐ前にも述べたように、非現実事態は、何の条件もなければ、想像してみるしかないものである。そのような事態について積極的な主張が行われるためには、何らかの主張の根拠(支え)が必要になる。「主張の根拠」というと、「推論の根拠(前提)」のように聞こえるかもしれないが、単なる「推論の根拠(前提)」は、推量表現全般において(どんなに不確かな判断を下す場合であっても)必要なものであって、「非現実事態+確言」形式に固有のものではない。ここで「主張の根拠」と呼ぶのは、確言的に述べることを支える拠り所となるものである。たとえば、同じように他人の様子をとらえての主張でも、その人の性格を知っているかどうかで主張に対する話手の積極性は変わってこよう。あるいは、あらかじめ段取りを聞かされているかどうかで、参加している行事の今後の進行について積極的な主張が行えるかどうかは変わってくるはずである。とくに後者の場合、段取りを聞かされているということは、実質的にすでに成り行きを知っているわけだから、その主張は、もはや狭義の推論的な判断——これを「推量」と呼ぶ立場もある——とは呼びにくいものにもなる。このように、主張の支え

のあり方と確言的主張との関係は多様であり得、支えとともになされる非現実事態への積極的主張も、結果的にさまざまなものになると考えられる。「べし」の用法の多様を、本稿は以上のように理解したい。

このような見通しに立って、次節では、「べし」の用法を、非現実事態の主張を支える根拠のあり方によって整理してみる。厳密に分類とは言いにくいものになるが、「べし」の用法やあらわす意味が「非現実事態+確言」形式という規定の枠の中におさまるものであることを確認してみたいのである。

2. 用法の概観

前節の見通しに沿って、上代の「べし」の意味・用法を概観していこう。あらかじめ全体を示しておけば、まず根拠のあり方によって、A〔直前〕状況が根拠となっているもの、B〔論理・法則・予定〕が根拠となっているもの、C〔価値・規範〕が根拠となっているものに分けられ、A―C三種の根拠のうち複数において共通にあらわれるゆえに、三分類に乗りにくい意味(含意)を、X〔非現実事態成立の主張の含意〕とする。見ていこう。

2. 1. A〔直前〕状況が根拠になっているもの

まず、眼前状況が「べし」句の表現する非現実(未来の)事態の成立寸前としてとらえられ、それによって当該事態に対する積極的な主張が可能になっていると理解されるものがある。これをA種としよう。A種では、現代語訳をつける場合、連用形につづ

く「様態」そうだ」が当たることが多い。

- (1) 秋山の木の葉もいまだもみたねば今朝吹く風は霜も置きぬべく(霜毛置應久(万二三三))

- (2) …瀧の上の桜の花は咲きたるは散り過ぎにけり含めるは咲き継ぎぬべし(可開繼) …(万一七四九)

- (3) 否も諾も欲しきまにまに許すべき(可赦 かたちは見ゆや我も寄りなむ(万三七九六)

あらわされる事態そのものは、(1)、(2)のように自然の変化(ここでは降霜や開花)の場合もあれば、(3)のように人の行為の場合もある(3は非礼を許すことさえ起こりそうな老翁の様子を歌っている)。中西(一九六九a、b)が「様相的推定」と呼んだものの(中の核部分)はこれに相当しようし、川村(一九九五)が(兆し・気配)と呼ぶものもここにふくまれる。

ここに挙げた例でも、「べし」句そのものは「非現実事態」を表現していると考えられる。とすると、眼前の「直前状況」と「べし」で表現される事態との関係は、推論関係(根拠と帰結)としてとらえられるかもしれない。上でも触れた中西(一九六九a、b)の「様相的推定」という用語もこのような感覚であろう。だが、一方で、NAROG(二〇〇二)がA種に当たる用法を認識的モデルティの用法に組み入れつつもその客観的な側に位置づけたことからもうかがえるように、典型的な推論判断を表しているとも言いがたい。A種では、未来の事態の眼前状況への浸潤が表わされている、ということもできそうである。つまり、非現実事態の萌芽を、現在の状況の中に見てとっているわけである。とすれば、

主張の根拠としての「(直前)状況」と「べし」の表現とのあいだの関係は、典型的な推論関係というよりは裏返し言い換えということになろう。

また、次の(4)―(6)もここにふくめて考えられる。

- (4) ほととぎす鳴く羽触れにも散りぬべみ(落奴倍美)袖に扱き入れつ藤波の花(万四一九三 一云歌)

- (5) 草枕旅行く人も行き触ればにほひぬべくも(尔保比奴倍久毛 咲ける萩かも(万一五三三))

- (6) 引き攀ちて折らば散るべみ(折者可落) 梅の花袖に扱入れつ染まば染むとも(万二六四四)

これらの例であらわされる内容はそれを引き起こすきっかけが必要で、無条件で起こるわけではない点が特殊であるが、ある種の状況が根拠となった表現である点では(1)―(3)にひとしい。

(5)や(6)は仮定条件句を伴っているが、条件句はそうしたきっかけを表していて、全体として推論が表されているわけではない。ある出来事や行為(ほととぎすの羽が触れること、旅人が萩の花に触れること、自分が手折ること)さえあれば、ある事態(藤波の花が散ること、花の色が衣服にうつること、梅の花が枝から散ってしまうこと)が即座に起こることがあらわされているのである。

2. 1. 附. A種からの展開…「比喩・誇張」

さらに、A種からの展開として、次のような例を理解することができよう。

- (7) 常人の恋ふと言ふよりは余りにて我は死ぬべく(和礼波

之奴倍久）なりにたらずや（万四〇八〇）

（8）夢のごと君を相見て天霧らし降り来る雪の消ぬべく思ほ

ゆ（可消所念）（万三三四二）

現代語訳に際して「（様態）そうだ」が訳語に当たることもふくめて、ここまでに見た諸例と共通点が多いが、ここに挙げた例であらわされるのは極端な事例であり、客観的にはそもそも当該の事態は起こりそうにない。これらの例で、「べし」に先行する動詞の内容は（典型的なA種の例1～3などとはちがって、次の瞬間に実現するようなものではない。たとえば、「こ」を考えると、現代語の「死にそうだ」でもそうだが、「死ぬべし」と言つて、本当に死んでしまうことはまれであろう。話手の主観からして、そのような極端な事例が成立しておかしくないことが表現されているのであつて、つまり一種の誇張表現なのである（8も比喩であることを考えると、類例であろう）。とはいえ、事態が実現しておかしくないということを述べ、その根拠が話手の経験している現状である点では典型的なA種の例と変わるところがない。眼前の状況を根拠とするタイプの特殊ケース、ないし、そこから展開した事例と位置づけられるのである（川村一九九五）。

2. 2. B「論理・法則・予定」——世界／場面のしくみ——が根拠になっているもの

B種としてまとめるのは、事実を超えて、事態の成り行きをあらかじめ規定しているような（世界や場面のしくみに関する）知識を話手がもっていることによって、非現実事態の主張が可能に

なっているようなものである。一般的な言明や推論に支えられるようなかたちで主張が行われることになる。中西（一九六九a、b）が「論理（的推定）」とした例の多くがここに分類される。あらわされる意味から考えると、伝統的に「推量」だとか「当然」だとか呼ばれてきた用法に重なることになる。

（9）万代に照るべき月も（可照月毛）雲隠り苦しきものぞ逢はむと思へど（万二〇二五）

（10）宇治間山朝風寒し旅にして衣貸すべき（衣應借）妹もあらなくに（万七五）

（11）藤波の咲き行く見ればほととぎす鳴くべき時に（奈久倍吉登伎尔 近付きにけり（万四〇四二）

（12）言問はぬ木にはありともうるはしき君が手馴れの琴にしあるべし（許等尔之安流倍志（万八一二）

（13）妹が見し棟の花は散りぬべし（知利奴倍斯）我が泣く涙いまだ干なくに（万七九八）

（14）春の内の楽しき終へは梅の花手折り招きつつ遊ぶにあるべし（遊尔可有（万四一七四）

（15）足日女み舟泊てけむ松浦の海妹が待つべき（伊母我麻都倍伎 月は経につつ（万三六八五）

（16）此ノ間二天ツ位二嗣（ぎ）坐（す）ベキ次ト為テ皇太子侍（り）ツ。（此乃間尔天豆尔嗣坐倍止為氏皇太子皇太子侍（り））（続日本紀宣命第七詔）

A種に対して、B種は主張の根拠のあり方もさまざまであるが、大きく分ければ、根拠となる知識が、①経験を超えた知識や

信念^③(事態間の関係をふくむ)であるか(9、10)、②季節の推移や人・物の性質などのように経験から一般化されたものであるか(11、14)、③約束や予定のように人為的に定められたものであるか(15、16)、によって三つに分けることができる。③約束や予定のような場合、根拠と主張される内容が重なるゆえ、かなりちがって見えるかもしれないが、ここでもいったん予定や約束が確定してしまえば、その通りに動くはずの世界のあり方のようなものとともに考慮されていると考えられ、①や②—ここでも論理の体系全体が背後にある—との共通点を見てとることができるだろう。

根拠のさまざまに応じて、結果的な解釈もさまざまである。上で「推量」とか「当然」と呼ばれてきた用法に重なる、と述べたが、論理の必然とか推量として理解されるだけでなく、一般的可能性を確認するような意味で理解されたり(14)、予定(15、16)として理解されたりすることもある。訳語は多く、「はずだ」が当たるが、一般則や物の性質を元にさらに推論が行われているような場合には、単なる推論判断に接近し、「にちがいない」が適当になる場合もある(13、14)。また、一般的な可能性として理解される場合には「ものだ」などがふさわしく見える。主張される内容が、実際と食いちがいを起こしている場合もある(9)。また、次の(17)(18)のように仮定条件句を伴う例も存在する。

(17) たらちねの母に申さば君も我も逢ふとはなしに年を経ぬ
べき(年可経)(万二五五七)

(18) 夕々に我が立ち待つにけだしくも君来まさずは苦しかる
べし(應辛苦)(万二九二九)

連体法では、(10)(11)(15)のように「はずだ」で理解して問題ないものも多いが、特別な訳語を与えにくくなる場合も存在する。次の(19)も特別な訳語を当てにくいものだが、物の性質が根拠になった言明で、そのような述語によって、当の物が修飾されているためであろう。しかし、「べし」のはたらきそのものは、ここまで挙げてきた例と変わらなないと考えられる。

(19) 朝な朝な我が見る柳うぐひすの来居て鳴くべき(来居而應鳴 森にはやなれ(万一八五〇))

なお、次の(20)や(21)は、背景となる知識が見てとりにくい(訳語も「はずだ」は当たらず、「にちがいない」とせざるを得ない)。単なる推量判断のようにもみえるが、宴の素晴らしさを誉め称えたり(20)、妻を失った悲しみを歌ったり(21)、という背景(目的)をもって歌われていると考えられ、物の性質と一般則による推論判断の例(13、14)に連続的なものととらえるべきであろう。B種の枠内で理解可能なものと考えられる。

(20) 梅の花折りてかざせる諸人は今日の間は楽しくあるべし
(多努斯久阿流倍斯)(万八三三)

(21) 都なる荒れたる家にひとり寝ば旅にまさりて苦しかるべし
(可辛苦)(万四四〇)

2. 3. C 「価値・規範」が根拠となっているもの

C種に分類するのは、価値や規範が主張の支えになっているとみられるものである。価値や規範は、事態(主に主体的な行為)の実現・成立ののぞましさを正当性を保証するものである。話手が

保持し、話手の属するコミュニティの中で共有された価値や規範——のような行為や事態のぞましいかに関する考え——とその体系に支えられて、非現実の事態の成立が主張されるわけである。A種やB種の場合とはちがって、世界の成り行きが通常必ずそれにしたがわねばならないようなものではないが、それらとはちがった次元から、事態の成り行きを規定するものであり、これもまた、非現実事態の成立の主張の積極的保証となり得るだろう。⁽⁶⁾現代語訳では、「べきだ」や「のがよい」「ほうがよい」などが当たる。一般に当為・義務などと呼ばれる用法類型であって、中西(一九九八)が「意志」をあらわすとし、川村(一九九八)が「事態の妥当性を述べる」としたタイプの用法がこれに相当する。

(22) 隠り沼の下に恋ふれば飽き足らず人に語りつ忌むべきもの(万二七九)

(23) ますらをは名をし立つべし(名乎之立倍之 後の代に聞き継ぐ人も語り継ぐがね(万四一六五))

(24) 海原の豊けき見つつ葦が散る難波に年は経ぬべく思ほゆ(倍奴倍久於毛保由)(万四三六八)

(25) 験なきものを思はずは一坏の濁れる酒を飲むべくあるらし(可飲有良師)(万三三八)

いずれも当該の事態のぞましさが語られている。ただし、次項にみる「要求」・「許可」・「願望」と区別して、のぞましさと正当性のみを述べるような例を探すのは意外にむづかしい。(22) (23)は「規範」と呼ぶのがびびったり来る例、(24) (25)は「価値」と呼ぶのが適当な例であろう。(25)は、「ずは」の後句に(「まし

でなく)「べし」が用いられている例だが、現実になり立っている(成り立つことになる)事態との食いちがいによって、そののぞましさが語られており、この例でも「べし」によって成立するにふさわしいものとして事態が述べられていると考えられよう。

2. 3. 附 C種の特殊ケース(「要求」・「許可」・「願望」)

行為の実現・成立の正当性・のぞましさが、具体的な文脈の中で、その成立をコントロール可能な主体(行為主体そのものや、その背後の責任者)に向けられた場合、単なる正当性やのぞましさを超えた意味を実現することがある。

(26) 我が祭る神にはあらずますらをにつきたる神そよく祭るべし(好應祀)(万四〇六)

(27) 我がやどの萩咲きにけり散らぬ間にはや来て見べし(早來可見)奈良の里人(万二二八七)

(28) 真野の池の小菅を笠に縫はずして人の遠名を立つべきものか(可立物可)(万二七二二)

(29) 恋ひしくは日長きものを今だにもとしむべしや(乏之牟可哉)逢ふべき夜だに(万二〇一七)

(30) 我妹子に恋ひつつあらずは刈り薦の思ひ乱れて死ぬべきものを(可死鬼乎)(万二七六五)

いずれも、のぞましさと正当性が問題になっていることは明らかであろう。まず、行為に関する正当性の主張が、自分以外の具体的な相手に向けられると、聞手への「要求」や「勧め」(26、27)、「許可」(28、29)があらわされる。ただし、後者は「許可」と

いっても、反語文（結果的に否定的な意味になる）で用いられ、すでに実現した行為に言及することが多い。その場合、行為の正当性の有無を問うて、聞手に対する非難の色が前面に出るようである。また、一人称の行為に関する例（30など）については、「意志」をあらわすとされることがあるが、主体の独り決めによる単なる「意志」と理解可能な（したがってのぞましさに還元できない）例は見当たらないようである。⁽⁸⁾ のぞましさの主張に重点があるとみて、「意志」という用語は使わず、「願望」と呼んでおく。

2. 4. X非現実事態成立の主張の含意（A↖C種の複数から生ずる意味）

本稿がXとしてまとめるのは、A↖C種の特殊なケースとして理解できそうな意味・用法群である。とはいえ、A↖C種の個々の用法展開や、それぞれにおいて生ずる特殊な意味については、すでに触れてきている（2. 1. 附. 2. 3. 附. Xにまとめるのは、あらわされる意味には共通点があり、まとめる必要がある一方で、事例によってA↖C種いずれかとの連続性が見てとれるため、個々の種に所属させにくいものである。大きく二つに分け、それぞれ、I「可能」をあらわすもの、II「危惧」／「行為不可避の状況」をあらわすものとしておく。以下で見えていく個々の事例でも確認できるように、こうした意味の実現には強い条件が必要になるようであり、A↖C種が具体的な文脈において持つ含意として理解すべきものであろう。

2. 4. 1. X-I「可能」

「べし」には、次のように、「できる」「打消形「べからず」では「できない」という「可能」（不可能）の意味が指摘されてきた。もちろん、実例でも確認できる。

(31) たぶてにも投げ越しつべき（投越都倍吉）天の川隔てればかあまたすべなき（万一五二三）

(32) 二つなき恋をしすれば常の帯を三重に結ふべく（三重可結）我が身はなりぬ（万三三七三）

(33) 常世辺に住むべきものを（可佳物乎）剣大刀己が心からおそやこの君（万一二七四一）

(34) 別れてもまたも逢ふべく（復毛可遭）思えば心乱れて我恋ひめやも（万一八〇五）

(35) 又天下（の）政（に）置て独（り）知（る）ベキ物（に）有（ら）ず。（又於天下政置而知阿倍物不有／統日本紀宣命第七詔）

(36) 乾政官大臣ニハ敢テ仕（へ）奉（る）ベキ人无（き）時ハ空ク置テ在（る）官ニアリ。（乾政官大臣が敢天仕奉候人无時置空

久置馬在官利阿／統日本紀宣命第二十六詔

しかし、「可能」の意味をあらわす例は、ここまでA↖C種に分けてみてきた主張の根拠のあり方の区分の中に、きれいに位置づける（どこか一つにおさめる）ことができない。ここに挙げた例をみても、まず、(31) (32) は眼前の状況・環境内の「アフオーダー」の存在から、(33) (34) は運命や予定などから、それぞれ、ある内容を「できる（できそうだ）」と述べているものとみなせる。ここまでの分類からは、前者はA種と、後者はB種と、それぞれ共通

点を持つわけである。また一方で、(35)(36)のような例(宣命の例を挙げたが、万葉集には見出しにくいようである)は、出来事のふさわしさや正当性が語られているとも考えられ、C種との連続性を感じさせるものである(NARPROG二〇〇)⁽⁹⁾。このような状況は、どうして生ずるのだろうか。

ここでは、「可能」について、「主体が意図した場合に、当該行為の実現の余地・可能性がある」ことの表現だと考えておこう。この規定は、それほど特殊でも不自然でもないと思われるが、この規定からすれば、用言が意志的動作をあらわす動詞に大きくかたよることも当然ということになる。何らかに意図が介在する余地がなければ、「可能」ということがそのものが意味を失うだろうからである。

一方、本稿の理解では「べし」は、「非現実事態・確言」の形式であり、そこで表現されるのは(肯定文の場合)、あらわされる非現実(未来および可能性領域)の事態や動きが、すぐにも／当然成り立つこと、あるいは成り立つことがのぞましいということであった。すぐ前に述べた本稿の「可能」の規定から考えると、未来や可能性の領域で行為が意図の通りに成立するということを述べれば、とりもなおさず、その行為の「可能」を述べていることになる。また、非現実事態ののぞましさを述べることは文脈によつては「可能」を含意することになる。本稿が仮定する「べし」の性質からして、「べし」のつづく動詞の意味のあり方によつては、上でA～C種に分けてみてきた用法全般にわたつて「可能」の意味が生ずる余地があるのである。

なお、「可能」用法の位置づけについては、これまで、論者によつて意見が分かれてきた。伊東(一九八八)のように、「べし」のあらわす「可能」を「願望の実現」のみであるとし、「べし」の意味と文脈から生ずる含意に過ぎないととらえる立場がある一方で、川村(一九九五)は「べし」の「可能」が「願望の実現」にとどまらないことを指摘し、「願望の実現」におさまらぬもののみを「可能」用法と認定している。しかし、伊東(一九八八)で「願望の実現」に分類されるような「べし」の例は、のぞんで起ったことではなく、あくまで、のぞめば起こる余地があることをあらわしているのであつて、これも上の「可能」の定義から外れるものではない。⁽¹²⁾主張の根拠のあり方によつて、それぞれニュアンスと性質に異なりは生じようが、全体として、なお、「べし」の意味から生ずる含意だといえるのではない。⁽¹³⁾

2. 4. 2. X-Ⅱ「危惧」／「行為不可避の状況」

先行研究で指摘されることはないようであるが、根拠からするとA種やB種に分類されそうな例の中に、「かねない」とか「ねばならない」との現代語訳が当たり、「危惧」／「行為不可避の状況」とでも呼ぶべき意味が読み取れる場合がある。⁽¹⁴⁾「危惧」はA種で目立ち、「行為不可避の状況」はB種で目立つ意味である。あらわれ方はことなるが、どちらも積極的にはのぞまれない事態の実現にかかわる点で共通点を持つ。また、C種からはどちらのタイプの意味もあらわれないようである。

「危惧」から見よう。

(37) ちはやぶる神の斎垣も越えぬべし(可越)今は我が名の惜しけくもなし(万二六六三)

(38) 思ひ出でて音には泣くともいちしろく人の知るべく(人
之可知)嘆かすなゆめ(万二六〇四)

(37) では恋心ゆえに禁忌をおかしそうな／おかしかねない(一人称の)状態が、(38)では嘆きゆえに思いが人の知るところになりそう／なりかねない状態があらわされている。人事にかかわる点が特殊ではあるが、A種との連続性は明らかであろう。

一方、「行為不可避の状況」とするのは次に挙げる例のようなタイプである。

(39) 白たへの袖別るべき(袖可別)日を近み心にむせひ音のみし泣かゆ(万六四五)

(40) 鎌倉の見越の崎の岩くえの君が悔ゆべき(伎美我久由倍岐)心は持たじ(万三三六五)

これらは、「ねばならない」という詁語が当たり、その点だけみると、C種とも似てみえる「べきだ」と「ねばならない」は現代共通語で類義関係にあるものとして、しばしば問題になるところである⁽¹⁵⁾。しかし、ここに分類する(39)(40)などの例は、予定・約束あるいは運命などによって、主体の行為の実現が不可避のものであること、つまり、主体の今後の行為(したがって一種の非現実事態)が起くことが、(主体の選択とは無関係に)すでに決定されていることとの表現であるとみなすことができる。つまり、むしろ、B種の特殊ケースであるとみられるのである。

「危惧」にせよ、「行為不可避の状況」にせよ、あらわされる内

容は、定義的に起こっていない事態である。しかも、少なくとも主体から希望されない内容はあり得ない「可能」の場合とは異なっており、話手がその実現を積極的には志向していない。つまり、「可能」と共通点を持ちながら、一面で裏返しが存在だ、ということになる。そのように考えると、「危惧」／「行為不可避の状況」の意味の発生についても、「可能」の場合に準じて理解できることになろう。前項に見た「可能」と同様に、「危惧」／「行為不可避の状況」もまた、一定の条件下において、非現実事態の成立を述べることに伴って生じ得る含意なのである。ただし、「可能」とは異なっており、話手が当該の事態をのぞんではないから、C種(規範・価値・行為指針のようなものにもとづいて、起こっていない行為がなされることの正当性やのぞましさを主張する)の場合には「危惧」／「行為不可避の状況」が含意されることがないわけである⁽¹⁶⁾。

3. 「べし」の意味・用法の関係

前節で用法を概観しつつ述べてきたことをまとめ、A～C三種の関係と、Xの位置づけについてあらためて考えておこう。

A種では表現される事態の直前ととらえられる眼前の状況(「直前」状況)が、B種ではより抽象的に事実の成り行きを規定する法則やシナリオのようなもの(「論理・法則・予定」)が、それぞれ非現実事態の主張の根拠となっておりとみられた。両者は、根拠の存在する次元が異なっており、前者では現実内の(個別の)事実によって、後者では抽象的な背景によって、非現実事態の主張が支えられている⁽¹⁷⁾。では、C種はどうか。ある種の「非現実事

態」は、現実のありさま・なりゆきや、それを支える論理とは別に、事態をコントロール可能な（事態の実現・非実現に責任のある）主体（が属するコミュニティ）が持つ「どのような事態・行為がよいものか」に関する知識（価値・規範）とその体系によって、それが成立することが主張され得る。つまり、A→C種で主張の背景となっている根拠は、それぞれがったかたちで、非現実事態の成立を積極的に保証しているのである。

また、その根拠が大きく三つに分かれるのも、おかしなことではないように思われる。まず、A種「直前」状況」とB種「論理・法則・予定」とは、現実の状況の今後の成り行きに関する主張の根拠となる点で、非現実事態を「価値」の次元から根拠づけるC種「価値・規範」とは大きく異質である。一方、B種とC種とは経験とは別の次元から規定するものが根拠となり、あるいは体系的知識―B種であれば論理や世界のあり方の全体、C種であれば価値・規範の体系―がともに考慮される点でA種とは異なっているのである。このようにB種が、A種、C種と（それぞれ別の観点から）共通点を持つようなかたちで存在していることになる。もちろん、これらは全体として、非現実事態の成立に関する積極的主張を支える根拠として一つにくくられる。本稿のA→C種は、すでに述べてきたように、中西（一九六九a、b）の「様相（的推定）」「論理（的推定）」「意志」に対応している。中西（一九六九a、b）の三分類は、「べし」の確言的主張の根拠のあり方の三区分を、「べし」の用法の問題として語っていたことになるわけである。同時に、「論理（的推定）」のうちに本稿のC種の一部を加え、「論

理（的推定）」から「意志」が生ずるとの理解をこころみているが、これは、上で述べたB種とC種の共通点を重視したものであろう。

一方、Xに分類した用法―X→I「可能」とX→II「危惧」／「行為不可避の状況」―についても、A→Cの三分には乗せにくいのが、根拠にもとづく非現実事態の成立の積極的な主張と無関係なものではない。あらわれ方にちがいはあるが、どちらも「べし」によって果たされる非現実事態に関する成立の主張に伴う含意であり、それゆえに、根拠のあり方をこえて生じ得ると理解されるのである。

以上、上代の用法の実態に関するかぎり、「べし」が「非現実事態・確言」の形式であり、その用法が大きく主張の根拠のあり方によって分化している、という本稿の「べし」理解の枠内におさまることが確認できたかと思う。これを踏まえて、ここまでの本稿の議論は、(41)のようにまとめられる。

(41)

非現実事態の主張の根拠		
A 種	B 種	C 種
事態の成り行きへの判断根拠		価値次元からの根拠づけ
現実そのもの	現実と別次元から成り行きを規定	

↓
X（非現実事態成立の主張の含意）

4. おわりに

以上、仁科(二〇一六)で見通しのみ示した上代語の述語体系中の「べし」の位置づけ―「非現実事態+確言」形式―に沿って、上代の「べし」を概観してきた。用法の実態が、見通しから大きくはみ出すものではないことを確認できたかと思う。

本稿の議論は、一見して分かるように、川村(一九九五)などに近い出発点から、中西(一九六九a、b)の用法の三分を位置づけなおすようなものとなっている。そこで採用した主張の根拠のあり方という整理の基準も、伊東(一九九四)に見出せるものである。本稿の議論に、どこまで新しさがあるかは分からないが、これまでの研究の蓄積によって、「べし」の用法の広がりに関する問題の解明が可能であることは示せたかと思う。一方で、堀口(一九七九)、大鹿(一九九九)、井島(二〇一四)が議論の中心に据えた「べし」の対象的意味の卓越の問題、従来「べし」の意味の中心に据えられてきた「必然性」「当然性」の中身の検討など、触れられなかった論点もある。とくに前者の問題は、述べ方の面から「べし」を特徴づけようとする本稿の如き立場からはあつたにくい問題である。⁽¹⁹⁾ 議論の不十分を自覚しつつ、稿を閉じる。

注(1) この規定は、尾上(二〇〇一)での「非現実事態承認」という規定におおむね一致する。また、「観念上の事態成立を承認する」という川村(一九九五)などの「べし」に対する規定にも非常に近い。が、用法分類も、「べし」に対する規定と用法の分化のかかわりに関する考え方も、川村(一九九五、一九九六、一九九八、二〇〇二)

のそれとは異なっており、結果的に、かなりちがった議論となっている。

(2) 「現実未確認事態+確言」の形式と理解する「らし」について、仁科(一九九八)で行ったのと同様の議論である。中古の和歌を対象とした伊東(一九九四)も同様の線―判断の必然性を支える根拠のあり方―から議論を行っている。本稿とは議論の方向が異なるが、重要な視点である。

(3) 純粋な論理や計算をあらわす例があってもよさそうに思われるが、見出せない。

(4) ただし、推量として理解された場合、つねに確度が高いものとなるわけではない。後に見る(18)では「けだしくも」と呼応している。

(5) (13)「咲きぬべし」は自然現象をあらわす動詞の例だが、遠く離れた都の桜の花の開花を考える歌であり、A種とは考えにくい。ここに述べたとおり、ひとまず、A種・B種とC種との区別は明確に存在するが、宣命にみられるような、ある行為に正当性を付与する源泉となる権威や権力をもった主体の発話の事例では、A種・B種とC種との境界が曖昧になり、単なる見通しが語られているのか、実現の正当性が語られているのか区別しにくくなる。

(7) といえ、大鹿(一九九九)も指摘するように、上代では「べからず」が禁止を表した例が見られない。
(8) 問題になりそうなのは、次に挙げる例くらいのものである。
・剣の池の蓮葉に溜まれる水の行くへなみ我がする時に逢ふべしと(應相登) 逢ひたる君を：(万三二八九)

・今は我は死なむよ我が背生けりとも我に寄るべしと(吾二可縁跡) 言ふといはなくに(万六八四)

主体の独り決めの「意志」との理解もできそうな例だが、三三二八九番歌は三三九〇番歌が反歌であることからしてB種と理解するのが適当であろうし、六八四番歌についても二三五五番歌の類例であることを考慮すると、A種の例として理解すべきところであろう。
・古の神の時より逢ひけらし今の心も常忘れえず(万三二九〇)

・うるはしと我が思ふ妹ははやも死なぬか生けりとも我に寄るべし
と（吾迹應依）人の言はなくに（万二三五五）

- (9) 「適当」とも「可能」とも解釈できる例の存在については、橋本（一九七二）などにも指摘があるが、そこでの「適当」の認定はここでC類とは異なるようである。

- (10) たとえば、尾上（一九九八）の「動作主がその行為をしようという意図を持った場合にその行為が実現するだけの許容性、萌芽がその状況の中に存在する」という「可能」の定義と中身はひとしい。

- (11) 意志的動作だけといってしまふと狭い。次の例などは「見」をどう訓むかは問題だが、「見ゆ」と訓んで「可能」の意味を読み取ることもありそうだからである。

- ・春日なる三笠の山に月も出ぬかも佐紀山に咲ける桜の花の見ゆべく（花乃可見）（万一一八七）
変化の背後に主体の行為を想定しているゆえであろう。

- (12) つまり、「べし」の用法で「願望の実現」とされる内容は、あくまで実現の余地や可能性であって、実現そのものではなく、「実現可能」と同一視はできない。伊東（一九八八）への対応が必要だったためであろうか、この点、川村（一九九五）の議論にも混乱があるように思う。

- (13) 次のように、「む」などでも「可能」が含意されていると言われる場合（中古の例であるが、次例など）があり、「べし」と関連づけて議論されることがある（橋本一九七九）。

・春日野の飛火の野守いでて見よ今幾日ありて若菜つみてん（古今一八）

たしかに、どちらも含意ということにはなるが、「べし」の場合には「む」の可能とは異なり、事態の成立の余地・萌芽が（主張の背景として）存在している点で、その述べ方と「可能」の含意がより密接にかかわっていることは強調しておく必要がある。

- (14) じっさい、例（37）は新編古典文学全集が「越えかねない」との現代語訳を与えている。

- (15) 「べきだ」との比較で、「なければならぬ」に「状況からの要請」という側面を認める丹羽（一九九二）の議論は、本稿にとっても重要である。

- (16) ここでは、C種を「のぞましさ」を中心にとらえている。上代の例について考えるかぎり問題がなさそうであるゆえ、このように議論するが、C種の用法が規則や法律のような用法（川村一九九八が中古の例として認定している）に展開してしまえば、主体ののぞみとは別のところに規則が存在するようなことも生じ得るかと思う。

- (17) 中西（一九六九a、b）では、あとも触れるように「意志」は「論理（的推定）」から派生するものとの理解が示されるが、「様相（的推定）」と「論理（的推定）」の関係は明示的に述べられていない。「様相」と「論理」の分化の論理は、事実／論理の別として、述べる必要もないものとして考えられていたのではないかとすれば、「意志」の位置づけは異なるが、本稿の理解と重なることになる。

- (18) 堀口（一九七九）が中西（一九六九a、b）の議論に対して行ったような「訳語／判断の根拠の認定が恣意的ではないか、との」批判が、本稿にも向けられる可能性はある。しかし個々の例にどのような訳語があたえられるとしても、「べし」の用法がA～C種の中におさまっていれば、本稿にとっては大きな問題にはならない。

- (19) 仁科（二〇一四）は、この問題を意識しつつ、「べし」（をふくむ中間的性格を持った述語形式）の位置づけを考察したものであり、本稿を補う位置にある。参照された。

参考文献

- 井島正博（二〇一四） 上代・中古語の推量表現に関する一考察（早稲田日本語学会二〇一四年度講演会資料二〇一四年一二月六日）
伊東光浩（一九八八） 可能的「べし」存疑（中央大学国文31）
伊東光浩（一九九四） 「べし」の分類（関東学院女子短期大学短大論叢92）
大鹿薫久（一九九九） 「べし」の文法的意味について（『ことばとこと

のは森重先生喜寿記念』和泉書院

尾上圭介(一九九八) 文法を考える(6) 出来文(2) (日本語学17・10)

尾上圭介(二〇〇二) 『文法と意味Ⅰ』(くろしお出版)

川村 大(一九九五) ベシの諸用法の位置関係(築島博士古稀記念国語研究論集)汲古書院

川村 大(一九九六) ベシの表す意味・肯定・否定・疑問の文環境の中で(山口明穂教授還暦記念国語学論集)明治書院

川村 大(一九九八) 事態の妥当性を述べるベシをめぐる(東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集)汲古書院

川村 大(二〇〇二) 叙法と意味―古代語ベシの場合―(日本語学21・2)

川村 大(二〇一二) 『ラル形述語文の研究』(くろしお出版)

小柳智一(二〇〇四) 「ずは」の語法―仮定条件句―(萬葉189)

高山善行(一九九六) 助動詞ベシの成立―意味変化の視点から―(『国語学叢史の研究十六』)／『日本語モタリテの史的研究』ひつじ書房第2部4章)

中西宇一(一九九六a) 「べし」の推定性―様相と推定と意志―(萬葉71／中西一九九六六章に解消)

中西宇一(一九九六b) 「べし」の意味―様相的推定と論理的推定―(月刊文法2・2／中西一九九六六章に解消)

中西宇一(一九九六) 『古代語文法論助動詞篇』(和泉書院)

仁科 明(一九九八) 見えないことの顕現と承認―「らし」の叙法的性格―(国語学195)

仁科 明(二〇一四) 「属性」と「統覚」とそのあいだ―中間的複語尾の位置づけ―(『日本語文法史研究2』ひつじ書房)

仁科 明(二〇一六) 中古の「らむ」―述語体系内の位置と用法―(国語と国文学93・3)

丹羽哲也(一九九二) 「べきだ」と「なければならない」(大阪学院大学人文自然論叢23／24)

橋本研一(一九七二) 「べし」と「べし」の原義(『金田一博士米寿記念論集』三省堂)

橋本研一(一九七九) 「べし」における可能的意味―「可能」の意味史序説―(田辺博士古稀記念国語助動詞論叢)桜楓社)

堀口和吉(一九七九) 助動詞の意味―「べし」をめぐる―(山辺道23)

山田孝雄(一九〇八) 『日本文法論』(宝文館)

NARROG, Heiko (110011) POLYSEMY AND INDETERMINACY IN MODAL MARKERS — THE CASE OF JAPANESE BESI (Journal of East Asian Linguistics 11.2)

用例の引用は以下による(表記は改変した部分がある)。和歌の用例には国歌大観番号を付した。

・万葉集:『萬葉集本文篇・訳文篇』(塙書房)

・続日本紀宣命・古今和歌集:『新日本古典文学大系』(岩波書店)

また、用例の探索と収集に当たっては、以下の恩恵を受けた。

・『古事記総索引』(平凡社)／大野晋『上代仮名遣の研究―日本書紀の仮名を中心として』(岩波書店)／『萬葉集総索引』(塙書房)／『萬葉集電子総索引』(塙書房)／吉村誠氏作成による万葉集テキスト／北川和秀『続日本紀宣命 校本・総索引』(吉川弘文館)／『新日本古典文学大系CD-ROM版 八代集』(岩波書店)

【附記】

・本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)研究課題番号16K02742および二〇一六年度早稲田大学特定課題研究助成費(基礎助成)課題番号2016K1111による研究成果の一部である。

・草稿に対して、岡部嘉幸、小柳智一、福沢将樹、福嶋健伸、吉田永弘の各氏から貴重な助言を得た。感謝したい。